デカルトにおける理性と感覚(4)
～〈真理の探求〉について（その2）～

村　上　吉　男

以下は前回[1]と同じタイトルのもと，「問題の所在」としての「1 筆者の立場とは何か」「1-1〈真理の探求〉における思惟の〈方法〉とは何か」「1-2〈真理の探求〉における超自然的〈理性〉（知性(悟性）としての理性）とは何か」の「1-2-1 プラトンのいう魂や理性とは何か」に続く拙文である。

1-2-2　デカルトのいう精神 esprit または理性とは何か

次に掲げるデカルトの引用文が筆者の主張を肯定するにちがいない。すなわち，

ⓤ①Or de ⓐces idées les unes me semblent être nées avec moi, les autres être étrangères et venir de dehors, et les autres être faites et inventées par moi-même. Car, que j'aie la faculté de concevoir ce que c'est qu'on nomme en général ⓑune chose, ou une vérité, ou ⓒune pensée, il me semble que je ne tiens point cela d'ailleurs que de ma nature propre; mais ⓓsi j'ouïs maintenant quelque bruit, si je vois le soleil, si je sens de la chaleur, jusqu'à cette heure j'ai jugé que ces sentiments procédaient de quelques choses qui existent hors de moi; et enfin il me semble que les sirènes, les hippogriffes et toutes les autres semblables chimères sont des fictions et inventions de ⓔmon esprit.[2]（傍線部分筆者）

ところで，これらの観念のうち，一方は生得観念，他方は外来観念，また他方は作為観念であるようにわたしには思われる。なぜなら，（最初の生得観念にあって），一般にものとは，真理とは，思惟とは何んであるかの理解

能力は，ほかならぬわたしの本性そのものだけから得られるように思われるからである。だが（次の外来観念にあって），わたしがいまある騒音を聞いたり，太陽を見たり，暑さを感じたりするのは，こうした感覚がわたしの外に存在するいくつかのものから生じるとわたしがこれまで判断したためである。そして最後に（作為観念にあっては），セイレン，ヒポグリプスやキマイラに似たものはすべて，わたしの精神によってつくられているからである。（括弧内筆者）

ⓤ②Comme, par exemple, je trouve dans mon esprit deux idées du soleil toutes diverses: l'une tire son origine des sens, et doit être placée dans le genre de celles que j'ai dit ci-dessus venir de dehors, par laquelle il me paraît extrêmement petit; l'autre est prise des raisons de l'astronomie, c'est-à-dire de certaines notions nées avec moi, ou enfin est formée par moi-même de quelque sorte que ce puisse être, par laquelle il me paraît plusieurs fois plus grand que toute la terre.(3)

たとえば，わたしが太陽のまったく異なった二つの観念をわたしの精神のうちに見出すときに。すなわち，一方の観念は，感覚から引き起こされる観念，わたしが外から来るとすでにみなした観念に含まれるべきである。これによってわたしには，太陽は非常に小さいように見える。他方の観念は，天文学としての，いいかえるとその生得観念としての推論から獲得されるか，さもなければ，いかなる観念であろうと，わたしによってつくられるかするのである。これによってわたしには，太陽は地球より数倍大きいように見える。

ということであり，筆者の主張はまた，シモーヌ・ヴェーユが〈わたしたちがデカルトのうちに不明瞭，難点，矛盾しか見出さない〉(4)と強調した根拠を同時に証明することでもあろう(5)。

神の存在が明かされる『省察（第三）』中の前段引用文ⓤ①②において，筆者はこの〈神〉はもとより，〈わたし×事物〉の各存在を証明するいわゆる〈真理の探求〉(6)ならびにその精神（〈esprit〉）やその理性（超自然的理性），

かつ〈日常的用法〉ならびにその精神（〈âme〉）やその理性（〈自然的理性〉）だけでなく，さらに筆者のいう〈真理の探求〉[7]ならびにその精神（esprit）[8]やその理性（〈独自の理性〉）のことなどが暗示されていると捉え得るのである[9]。以下はこれらの引用文のかかる分析に当てられる。

まずⓤ①にあって，デカルトは観念には〈生得観念×外来観念×作為観念〉があることを打ち出し，各観念が何をもってそう名付けられるかを明確にする。その際この引用文以前での文脈から，原文傍線部分ⓐの〈ces idées〉の指示形容詞〈ces〉は想像（imagination），意志（volonté），感情（affection），判断（jugement）と受け取られ，〈idées〉とは各能力に依存する観念をさすがゆえに，そのいずれかの能力が〈生得観念×外来観念×作為観念〉のおのおのを形成しよう因子になると予測し得るのである。

〈生得観念〉において，原文傍線部分の〈真理〉と並列するⓑⓒの〈もの×思惟〉は，筆者の解釈によると，いわゆる〈真理の探求〉で当初より〈生得観念〉として位置づけられる〈わたし×神×事物〉の〈事物〉と〈わたし〉と同じであることにほかならなくなる。なんとなれば，この〈もの〉ないしは〈事物〉は後記するように，現実の事物をさしはしない〈もの〉なのであり，〈思惟〉はすでに記したように，〈わたし〉あるいは精神（〈esprit〉）に等しく換言されてよい[10]といい得るからである。だから前述した諸能力のうちで〈真理〉はむろんのこと，その〈生得観念〉である〈もの〉や〈思惟（わたし）〉に向けてそれこそ〈思惟〉し，いずれにも到達しようという，同じ〈生得観念〉になることをめざす能力はデカルトにあって，〈意志〉または〈判断〉なる，とどのつまりは前記しておいたような超自然的理性なる能力[11]であって，少なくもここでは〈想像〉や〈感情〉なる各能力が該当するのではないとみておかざるを得ないのである。

また〈外来観念〉において，原文傍線部分ⓓ中の〈騒音を聞く×太陽を見る×暑さを感じる〉の動詞〈ouïr×voir×sentir〉という各〈sentiment〉は，筆者をして〈esprit〉ではなく，〈âme〉の諸能力であると解釈せしめられよう〈感覚〉となる。デカルトの用語〈âme〉は周知のとおり，〈esprit〉と〈corps〉の心身合一における精神である。別言すると〈âme〉はそれが〈corps（身体）〉とともにあると指摘し得る際の精神なのである。この〈âme〉に、諸〈感覚〉のうちでは，とりわけ身体（器官）の能力である〈ouïr×voir〉

たる〈ressentir(sens)〉[12]が受け入れられるとき，この〈ressentir〉のsens化された能力は〈âme〉にとって，自然的能力なる〈受動（passion)〉すなわち〈sentiment〉[13]となるし，あるいはまた，その〈âme〉の〈受動（感覚)〉[14]やこれも自然的諸能力でしかない〈意志〉と〈判断〉とに，これもまた〈âme〉の自然的能力であって，〈意志〉や〈判断〉と同じ能動である〈sentir〉が働きかけるとき，〈sentir〉のsentiment化する能力は，〈情念（passion)〉すなわち〈精神（âme）のsentiment〉[15]となるのである[16]。筆者はこれらのそれぞれをいわゆる〈真理の探求〉とは別に立てて，〈受動〉や〈情念〉の〈日常的用法〉とみなしたが，この両用法はデカルトも⑥で〈こうした感覚がわたしの外に存在するいくつかのものから生じる〉と記すように，現実の事物（もの）にかかわるしかないわけである。それゆえ〈外来観念〉は，現実の事物（もの）に起因し，そのためかそこに前述した〈想像×意志×感情×判断〉の各自然的能力が随時作用して〈生じる〉といってかまわなくなる（〈感情〉は〈感覚〉をよりどころにするのはいうまでもない)。だがそれはなぜなのか。

ⓥ Or, entre ces figures, ce ne sont pas celles qui s'impriment dans les organes des sens extérieurs, ou dans la superficie intérieure du cerveau, mais seulement celles qui se tracent dans les esprits sur la superficie de la glande H, *où est le siège de l'imagination, et du sens commun*, qui doivent être prises pour les idées, c'est-à-dire pour les formes ou images que l'âme raisonnable considérera immédiatement, lorsqu'étant unie à cette machine elle imaginera ou sentira quelque objet.[17]

ところで，これらの表象のうち，この機械（身体）に結合された理性的精神（âme）が何らかの対象を想像したり感じたりするときに，その理性的精神（âme）が直接考察するかたちや像，すなわち観念とみなされなければならぬ表象は，外的感覚器官あるいは脳の内表面に刻み込まれる表象ではなく，（動物）精気によって，想像と共通感覚の座である腺Hの表面に描かれる表象だけなのである。（括弧内筆者）

引用文ⓥ中の〈想像と共通感覚の座である腺H〉という箇所において，まず〈腺H〉すなわち〈松果腺〉[18]は，原文〈cette machine〉の指示形容詞がその〈腺H〉もさすからして，〈機械〉つまりは身体であると捉えられる。かつそこに〈何らかの対象〉が〈動物精気〉[19]によって伝えられる。〈動物精気〉は〈対象〉自体をではなく，身体の能力である想像 imagination と感覚 sens とを各〈想像と共通感覚の座である腺H〉に伝える。この〈腺H〉に感覚のほか想像も伝えられるとは，デカルトが『情念論』で〈Des imaginations qui n'ont pour cause que le corps（身体だけを原因とする想像について）〉[20]と記すからである。そして〈腺H〉で身体の想像や感覚が〈理性的精神（âme）〉とかかわるとされる。ここから明かされるのは，身体にはこの想像と感覚の能力しかないこと，あるいはそのおのおのに〈âme〉の〈想像したり感じたりする〉各能力が対応すること，あるいはまた〈Des imaginations... qui sont formées par l'âme（精神に生み出される想像について）〉[21]という，〈âme〉の自然的能動的能力の〈想像する imaginer〉が身体の想像に作用することよりも，むしろその同じ能力に属する〈感じる sentir〉が身体の感覚に働きかけることに立つ方が，心身の合一を確実にさせるにふさわしくなるということなのである。この合一にあって〈âme〉が身体に，身体が〈âme〉になるとみることもできよう。そこで〈âme〉としての〈想像 imagination〉〈感覚（受動）sentiment×情念 passion〉と〈感情 affection〉なる各〈観念〉すなわち各〈表象〉が身体〈腺Hの表面に描かれる〉といってよいことになる（ただしこれによらない〈情念（passion）〉の場合もあり，それは本文に後述する）。こうして〈âme〉の自然的諸能力である〈想像×意志×感情×判断〉のうちの〈想像〉や〈感情〉に依存し生まれるその各〈観念（表象）〉は，引用文ⓥの〈âme〉に確かに見出されてこよう。

だがそこには問題がないのではない。〈意志×判断〉についてはどうなっているのか，また〈これらの表象のうち，...理性的精神が直接考察する... 表象〉はどんな意味なのかが問われるからである。〈想像〉や〈感情〉が生じるあとの時間が考慮されるならば，この精神は〈理性的精神（âme）〉なのだから，他の能力である〈意志〉や〈判断〉の能動的働きかけがこの各〈想像×感情〉にあって不思議ではなかろう。いや時間のことが考慮されずとも，〈意志〉や〈判断〉はすでに指摘したごとく[22]，〈情念〉なる〈観念（表象）〉を形成

する際に真先きに作用しよう各能力であったのである。〈情念〉そのものはこの〈意志〉や〈判断〉のおのおのに〈感じる sentir〉がさらに働きかけて生じてくる。〈sentir〉は身体の感覚に〈意志〉や〈判断〉を介在させてから働きかける。この〈sentir〉にとってはだから，身体の感覚に〈直接〉作用せずに，いわば〈間接〉にかかわるしかない能力となる[23]。むろん前記したように，〈sentir〉は身体の感覚に，また〈想像する imaginer〉は身体の想像に〈直接〉働きかける場合もある。かくいえるのは〈腺H〉である〈共通感覚の座〉と〈想像の座〉がそれぞれ，これらの各対応を可能にするからである。それゆえ〈理性的精神が直接考察する〉とは，身体の感覚や想像の各〈座〉に対して，〈âme〉の〈sentir〉や〈imaginer〉が〈vouloir〉や〈juger〉の作用以前に〈直接思惟する（働きかける）〉こととみなし得るのである。

とまれ以上のことで，〈âme〉における〈表象〉が〈想像×意志×感情×判断〉によって生じると捉えることができるし，このことは〈ces figures（これらの表象）〉の指示形容詞がさすものでさらに明白になる。これが指示するのは引用文ⓥ以前の文脈から，たとえば〈運動×大きさ×距離×色×音×匂い〉〈くすぐったさ×苦しみ×渇き×歓喜×悲しみ×そのほかの情念〉[24]である。そこで〈これらの表象〉という〈表象〉には，〈想像×意志×感情×判断〉による〈観念（表象）〉がすべて含まれるとみることができる。しかし同時に〈これらの表象のうち〉と記されるかぎり，このあらゆる〈表象〉は〈理性的精神〉をして〈直接考察（働きかけ）〉せしめられるのではないという必要がある。すでに一見した〈情念〉なる〈表象〉が，また引用文ⓥ中の〈外的感覚器官あるいは脳の内表面に刻み込まれる表象〉すなわち〈記憶〉といってよい〈表象〉がそうなのである。

その〈記憶〉はしかし，何によって〈外的感覚器官あるいは脳の内表面に刻み込まれる〉のか。それは当然，身体の想像や感覚によってである。ここで確認すべきは，この身体の想像や感覚が〈腺H〉ばかりではなく，〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉にも関与し得るとみられることである。だが〈記憶〉において明らかなのは，その身体の諸能力がそれぞれこのいずれにもかかわることにあるのであって，これが身体の想像が〈想像の座〉に，身体の感覚が〈共通感覚の座〉に対応する〈腺H〉の場合と異ならせよう。再度いうと〈記憶〉にあって，身体の想像や感覚はどちらも〈記憶〉として[25]，かつ〈外的

感覚器官あるいは脳の内表面〉のどちらにも〈刻み込まれる〉(それは接続詞〈ou（あるいは)〉が証しとなろう）ということである。

この〈記憶〉に対して，〈âme〉の能動的に働きかけ得る能力はデカルトによると，註(25)に〈mon imagination〉と記されるように，その〈imaginer〉であり，また〈vouloir〉[26]であるという。だがその〈記憶〉にも引用文ⓥの〈理性的精神が何らかの対象を想像したり感じたりするときに〉とされる〈感じる〉を適用させねばならぬにもかかわらず，筆者はその〈感じる〉は〈記憶〉ではなく，〈情念〉のためにのみ働きかけると捉えておく。なぜか。それは〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉には〈記憶〉と〈情念〉の〈表象〉しか生じないし，それゆえ〈記憶〉の方に〈imaginer〉と〈vouloir〉が，〈情念〉の方に〈vouloir（または〈juger〉)〉と〈sentir〉が関与すべく割り当てられてあると指摘し得るからである。〈記憶〉に作用しよう〈imaginer〉〈vouloir〉はそれぞれ，〈âme〉としての〈想像〉や〈記憶〉を生み出す（したがって身体の想像や感覚が〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉に生じよう〈記憶〉は身体的記憶[27]であるといい得る)。〈情念〉に作用しよう〈vouloir×juger〉は前記もした通り，〈sentir〉の働きかけの前に身体の想像や感覚にかかわって〈情念〉形成の出発点として役立つ能力である[28]。だからこの〈vouloir×juger〉は〈記憶〉にではなく，身体の想像や感覚に対して作用することになるのである。すると〈âme〉の，〈記憶〉における〈imaginer〉と〈情念〉における〈sentir〉にとっては，両者とも〈直接〉身体の想像や感覚に結びつくことの不可能な能力となる（したがって身体の想像や感覚がそれぞれ〈腺H〉で〈直接〉対応して結合する〈âme〉の〈imaginer×sentir〉との関係に比して，同じ〈âme〉の諸能力でありながらも，こと〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉において〈記憶〉や〈情念〉に関与するその〈imaginer〉や〈sentir〉はおのずから異なる作用を強いられるといえよう)。要するに〈âme〉の〈imaginer〉や〈sentir〉はおのおの〈記憶〉を介して，〈情念〉の〈認識の起こり〉[29]となって作用する〈意志×判断〉を介して身体の想像や感覚と〈間接〉にかかわらざるを得ないということになる。

そしてここに〈記憶〉を生じさせるための〈意志〉や，〈情念〉誕生の契機のための〈意志×判断〉が働きかけるように用いられることは，〈âme〉には〈想像したり（想像）感じたり（感覚や感情）する〉以外の能力もあるという

ことなのであり，この〈意志〉や〈判断〉こそデカルトをして〈理性的精神〉といわしめると同時に，その名称の〈理性的〉を体現させ得る能力の一一となるのである。だからであろう，デカルトは心身二元論としてのいわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉のほかに，上記のような諸能力を打ち立てておくべく心身合一としての〈日常的用法〉の〈理性的精神（âme)〉を必要としたわけである[30]。

引用文ⓥに〈この機械（身体）に結合された理性的精神（âme)〉とあるから，以下では少しく心身合一のことが語られよう。すると心身合一が可能であるとみなされるのはいかなる場合なのか。それにはこれまで記した語でいえば，同ⓥの〈想像したり感じたりする〉を前提にして問うたところでの〈直接〉と〈間接〉が該当するであろう。およそ前者の場合は〈腺H〉において，後者の場合は〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉において，各身体の想像や感覚に対し，〈âme〉の〈imaginer〉や〈sentir〉がそれぞれ〈直接〉に，〈間接〉にかかわることであった。しかしながら，筆者は心身合一にあっては，〈直接〉や〈間接〉における〈âme〉の〈imaginer〉によってではなく，その〈sentir〉だけによって成立するとみる。別言すると〈直接〉における〈想像〉で，〈間接〉における〈記憶〉で，心身合一が成るということはない。心身は〈直接〉でも〈間接〉でも〈âme〉の〈sentir〉で結合されるのであり，身体の感覚（sens）とこの感覚（sentir あるいはその sentiment）の容認のもとでこそ，デカルトはわけても身体の sens と〈esprit〉中の sentir を排除させて主張しよう心身二元論とは別のこの心身合一なる思想を生み出せ得たといえるのである。

かかる感覚において，〈直接〉では身体の感覚の〈âme〉の〈sentiment〉化が，あるいは〈間接〉では身体の想像や感覚に〈âme〉の〈vouloir(volonté)〉や〈juger(jugement)〉，そのうえで〈âme〉の〈sentir〉の働きかけがみられた。そこから感覚による〈表象〉が生まれる。たとえば前記した〈これらの表象〉のうちで，〈色×音×匂い×くすぐったさ×苦しみ）たる〈表象〉は身体（感覚）器官別であっても，すべて同時間に，または同時に，〈腺H（共通感覚)〉や〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉に描かれはしない。そこで〈色〉だけを例にして語るとき（だからそれらでいろんな〈色〉は同時間に同時に描かれないことになる），〈色〉はどうなるか。〈直接〉の場合，〈âme〉

は〈受動〉として〈腺H〉で外的対象の〈色〉をそのまま受容する働きをなすであろうし，または〈腺H〉に伝わる〈色〉から何かを〈感じる〉とすると，〈色〉に対する〈感情 affection〉が生じてくるであろう。だがもしある時間での〈âme〉の〈sentir〉が〈腺H〉に〈直接〉働きかけることがないならば，身体の感覚（もしくはその想像でもよい）は〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉に〈色〉の〈記憶〉となって残されるか，あるいは〈色〉に接してときに体験するそれらの身体[31]自体の興奮性や鳥肌，つまり〈les objets que meuvent nos nerfs（神経を動かす対象）〉[32]，要するにそこからの〈quelques mouvements（ある運動）〉[33]によって，あるいはまた〈âme〉の〈sentir〉が〈意志〉や〈判断〉のあとに働きかけることによって[34]，〈情念〉なる新たな〈表象〉を描かせるしかなくなるかであろう（ただしこの新たな〈表象〉にとっては身体の想像は役立ち得ない能力となろう）。

ところで身体の想像が〈直接〉の〈想像〉や〈間接〉の〈記憶〉としてそれぞれ〈âme〉の〈imaginer〉にかかわろうが，しかしこのいずれによっても心身合一の成立の証しにみられないのは，各かかわりでの〈âme〉の〈imaginer〉がむしろそれより，デカルトに〈entendement aidé de l'imagination（想像に手助けされた悟性）〉[35]と語られるように，同じ〈âme〉の悟性（知性）との結びつきを強くする能力であると捉えられるからである。もとより〈直接〉での〈外的対象（身体の想像）〉に，また〈間接〉での身体の想像や感覚による〈記憶〉に〈âme〉の〈imaginer〉が働きかけることもなくはないであろうが，心身の合一はそれでもこの想像より感覚で可能になるとみて間違いなかろう，いや感覚だけで十分明かされると断じてもはやかまわぬのである。そして〈âme〉の〈imaginer〉は心身結合の証しとなる同じ〈sentir〉と悟性（知性）とをあたかもつなぐ役目に徹するであろうし，このことから，当然引用文ⓥの〈想像したり感じたりする〉も，註(35)の〈悟性（知性）〉もすべて同時間に，同時に働きかけることはできないし，ⓥの〈直接〉という視点と註(35)の〈悟性〉をつなぐことでは，感覚・想像・悟性（知性）の時間の順序が想定され，〈âme〉はこれに従わざるを得なくなるといってよかろう。とすればここに上記の結語が導き出されてこよう。すなわち〈直接〉の〈外的対象（身体の感覚）〉の受容〈表象〉は除いても，少なくも〈間接〉の〈記憶〉なる〈表象〉ではなく，〈感情〉や新たな〈情念〉なる〈表象〉を産出すべく各〈表象〉

に働きかけるは，〈直接〉と〈間接〉での，〈想像する imaginer〉であるよりも，〈感じる sentir〉であるということであり，そこにこそデカルトがいう〈âme〉の特徴，かつ〈âme〉をして心身合一を成り立たしめる特徴が見出されているということになろう。

しかも〈腺H（共通感覚）〉での〈外的対象〉と，つまりは身体の感覚と〈直接〉にかかわる〈âme〉の〈sentiment〉それ自身は身体の感覚（sens）が〈âme〉に受容される働きかけをみせることにすぎないがゆえに，それをもって筆者のいう〈日常的用法〉における〈受動〉となる一方，たとえば〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉での〈意志〉や〈判断〉と，つまりは身体の想像と感覚がそこで一早い〈意志〉や〈判断〉の作用を受けることで，〈âme〉の〈sentir〉にとってはとくに身体の感覚と〈直接〉ではなく，〈意志〉や〈判断〉と〈間接〉にかかわるごとく働きかけるその〈sentir〉は，それ自身身体との関係が一旦切断されたようにみえる〈âme〉自体の感覚でしかないがゆえに，それをもって筆者のいう〈日常的用法〉における〈情念〉となるであろう。心身の結合はだから，〈受動〉や〈情念〉がかかる経緯により生じることを知り得たこの点からも，もはや〈âme〉の〈想像 imaginer〉より，その〈感覚 sentiment や sentir〉にかぎられ委ねられねばならぬといえるし，心身合一に関する〈受動〉または〈直接〉，さらにその〈情念〉または〈間接〉ということによって，筆者はすでに触れた通り[36]，それぞれを身体と全体的に関係する心身合一，身体と部分的に関係する心身合一とみることもできたわけである。

〈直接〉の心身合一，全体的心身合一と名付けよう〈受動〉の〈日常的用法〉は再度いうが，〈腺H（共通感覚）〉に〈動物精気〉を介して[37]伝達される〈色（視覚）×音（聴覚）×匂い（臭覚）×くすぐったさ（触覚）〉〈苦しみ（これを身体的と捉えると内臓感覚の苦しみ）〉たる各感覚（sens）に対して，〈âme〉の〈sentiment〉が〈直接〉受容することは，それらの各〈感覚 sentiment〉なる〈表象〉を〈âme〉として描くこと，換言するとそれらの各〈表象〉は〈理性的精神が直接考察する（働きかける）... 表象〉に値させることにある。

〈間接〉の心身合一，部分的心身合一と名付けよう〈情念〉の〈日常的用法〉はこれも繰返しいうが，〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉に〈神経を介して〉[38]伝達される身体の想像よりも前段に記した感覚に対して，〈âme〉の

〈sentir〉が〈直接〉にではなく，つまり感覚に一早く作用した〈âme〉の〈意志〉や〈判断〉のいずれかのあとにこれらと同じく能動的に働きかけては（このことが〈âme〉の〈sentir〉にとって〈間接〉に働きかけるゆえんとなる），〈âme〉自体の〈感覚 sentiment〉である，〈腺H〉によらない〈情念（引用文ⓥに関連する例でこれに該当するのは〈(精神的）苦しみ×（精神的）渇き×歓喜×悲しみ×そのほかの情念〉である)〉なる〈表象〉を描くことになる。(〈腺H〉での〈直接〉の〈感情〉や〈情念〉は次回に検討する。)

それゆえ〈âme〉の〈sentiment や sentir〉は身体と〈直接〉では全体的に，〈間接〉では部分的に関係するといわざるを得なくなるのであり，このかかわりにおいて，それぞれの全体的と部分的なる心身合一が成るとみることが可能なのである。しかしながらなぜ，〈間接〉か，さらに〈情念〉は〈âme〉自体の能力となると語り得るかである。何度となく記した前者について，ここであらためてその〈間接〉から示唆される〈情念〉によっていえば，〈間接〉は〈情念〉が〈âme〉の〈sentir〉の働きかけをわけても身体の感覚にかかわらせるに，何より〈意志〉や〈判断〉の先行的作用を条件となすところの意味であるからであり，〈情念〉が〈âme〉自体の能力となる後者については，〈情念〉はその〈意志〉や〈判断〉がすでにして〈âme〉中の諸能力であり，それらの各作用のうえでおのおのに働きかける〈sentir〉の〈表象〉であるが，この〈情念〉でさえもが〈âme〉の産出でなくてはならないし，その能力になるからである（この〈意志〉や〈判断〉はもとより〈間接〉での能力となる)。

なお〈間接〉には身体の想像や感覚に対して，〈âme〉の〈imaginer〉が作用することも含意されるであろう。これは身体の想像や感覚が〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉に〈記憶〉として残り，その〈記憶〉なる〈表象〉にこの〈imaginer〉が能動的に作用して〈imagination〉になる[39]ことであって，〈間接〉における身体の想像や感覚と〈âme〉の〈imaginer〉については，これ以外何も付け足しはなされなかった。そればかりか筆者は，一方の〈腺H（想像)〉に伝達される身体の想像に〈直接〉働きかける〈âme〉の〈imaginer〉についても，それがたんに〈âme〉の〈imagination〉になるというほかなかったのである。もちろんそこに，〈直接〉における〈âme〉の〈imaginer〉が〈記憶〉に依拠しない〈想像 imagination〉となることによって，〈間接〉と比べての〈直接〉のその特色が見出されるであろう，またこの〈imaginer〉

が〈直接〉働きかけるのでなければ，身体の想像や感覚は〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉に伝えられ，その〈記憶〉にとどめられるであろう，またさらに〈直接〉と〈間接〉の〈想像〉は〈間接〉の方が悟性（知性）とより一層密に結びつこうとするであろうなどをいい添えるとしてもである。

そして今以上のことしか語れないでいるのは，この〈想像〉に関することよりも〈感覚〉に，筆者をして先きに取りかからせるからであるばかりか，〈想像〉は実際筆者にとって看過できない問題を提起せずにおかないがゆえに，〈感覚〉と同時にみるのではなく，個別に取り上げて論じる必要があると判断されたからである。それで問題としたいのは，とりわけ〈直接〉における身体の想像のことなのである。すなわち〈想像〉なる〈表象〉を〈直接〉描かせるところの，〈腺H（想像）〉に伝えられる身体の想像が，同じ身体の感覚（sens）以外のもうひとつの能力であるということである。別言すると，デカルトが感覚どころか，この想像さえ身体の能力とみなし得たことは，たとえばシモーヌ・ヴェーユにあっては，身体の能力がこの想像であり得ずとも，何か感覚以外のほかの能力が身体にあることを暗示させられもしたのではないか，かつ筆者にあっては，この身体の能力が彼女のいう〈感受性 sensibilité〉になるのではないかということを惹起させるのである[40]。

また以上からいえることは，いわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉における超自然的諸能力との区別があるにしろ，同じ名称で呼ばれ得る（ただし自然的）諸能力が〈âme〉でもみられる[41]ということである。デカルトがいう〈理性的精神（âme）〉の証したるといってよい〈意志〉や〈判断〉の諸能力のみか，そこには〈想像×記憶×感覚×感情×情念〉たる諸能力が配置されてあるではないか。デカルトはこれらをして〈理性的精神〉を成り立たせしめたのである。だからこの上記からして，これらの諸能力は〈超自然的〉と形容される〈esprit〉だけに備わった各能力ではむろんないということになる。ただこの場合，〈esprit〉に〈想像×記憶×感覚×感情×情念〉があると容認することは問題となるのであった。なんとなれば〈esprit〉では〈想像〉が悟性（知性）に手助けすること[42]はほとんどないとみておくべきどころか，もともとこの〈想像〉をはじめとする〈記憶×感覚×感情×情念〉も，確かに〈esprit〉の諸能力と想定されているといえども，このいわゆる〈真理の探求〉から排除させられる各能力[43]，〈無視されるべき〉各能力[44]でなければならなかったから

である。しかし〈âme〉の諸能力は〈esprit〉とおよそ逆であるからこそ，要するに〈âme〉はまずは〈感覚〉や〈情念〉によって立つと断じられるからこそ，その〈日常的用法〉はいわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉をあたかも補うさまをみせて成る思想であるとみなされるのである。

なおまた引用文ⓤ①の理解のために取り上げた同ⓥで，それが〈日常的用法〉を示唆するがゆえに，最後に確認されるべきは，〈直接〉や〈間接〉にであれ，〈âme〉が身体とかかわることで生じよう〈表象〉は，ⓤ①にいう〈外来観念〉であるということである。〈外来観念〉はⓤ①の中の〈外に存在する〉ⓥ中の〈何らかの対象〉（筆者のいう現実の事物），つまりは身体の想像や感覚と〈âme〉の諸能力が〈直接〉あるいは〈間接〉にかかわって成る〈表象〉である。要は〈外来観念〉とは身体の想像や感覚に対する〈âme〉の〈imaginer×sentir×vouloir×juger〉の〈直接〉や〈間接〉の各働きかけにより，〈âme〉にとっての〈想像×感情×意志×判断〉ないしは〈記憶×感覚×情念〉なる〈表象〉をさすとみることができるわけである。

そして今度はⓤ①の〈作為観念〉が分析されねばならない。そこでは〈セイレン，ヒポグリプスやキマイラ〉は〈作為観念〉であって，しかもⓔ〈mon esprit〉とある通り，〈わたしの精神によってつくられている〉と記される。ここはその〈esprit〉に注意しておくべきである。なんとなれば〈作為観念〉はいわゆる〈真理の探求〉の超自然的理性によってつくられると予想されるからである。ところがⓤ①の引用文の前後を参考にすると，そうでもないことが諒解されよう。

ⓦ①Entre mes pensées, quelques-unes sont comme les images des choses, et c'est à celles-là seules que convient proprement le nom d'idée: comme lorsque je ⓐ<u>me représente</u> un homme, ou une chimère, ou le ciel, ou un ange, ou Dieu même.... car soit que j' ⓑ<u>imagine</u> une chèvre ou une chimère, il n'est pas moins vrai que j' ⓒ<u>imagine</u> l'une que l'autre.[45]（傍線部分筆者）

わたしの思惟のうちのある思惟はいわばものの像（表象）であり，観念の名にふさわしいのがこの像（表象）である。たとえばわたしが人間，キマイ

ラ，天（空），天使，神をさえ想像するときのように。... なにしろわたしが山羊を想像するにしろ，キマイラを想像するにしろ，わたしが想像するということはどちらでも真であるからである。（括弧内筆者）

ⓦ②Mais aussi peut-être me puis-je persuader que toutes ces idées sont du genre de celles que j'appelle étrangères, et qui viennent de dehors, ou bien qu'elles sont toutes nées avec moi, ou bien qu'elles ont toutes été faites par moi; car je n'ai point encore clairement découvert leur véritable origine.[46]

もっとも今のわたしなら，おおよそ，すべての観念はわたしが外来のと呼び，外から来る観念，生得的である観念，わたしによってつくられた観念という種類に加わると確信することができよう。なにしろわたしはいまだこれらの観念の真の起原を明確にみきわめてはいないからである。

ⓤ①の前後の引用文とはそれぞれ，ⓦ①とⓦ②である。筆者はここで〈作為観念〉が〈esprit〉だけでなく，〈âme〉でも可能であることを明かそうとする際，ⓦ①はⓐⓑⓒなる傍線部分が，ⓦ②はそのⓦ①からの展開を予測させることがこの証明材料になるということができる。まずⓤ①の〈キマイラ〉の例に対するに，ⓦ①では〈わたしがキマイラを想像する〉と記される点に注目する必要がある。しかもデカルトはその〈想像する〉にⓦ①の傍線部分ⓐで〈se représenter〉，ⓑⓒで〈imaginer〉をもって充当させる。そこで確認すべきは，このⓑⓒの〈imaginer〉はそれ以外ではないがゆえに，ⓤ①と同じ〈キマイラ〉かどうか別にしろ，それを〈âme〉において〈想像する〉能力と捉えおくほかなくなることである。〈想像する〉は確かに〈esprit〉にも一能力として備えられてはいたが，それでも〈esprit〉にとって役立つ能力ではなく，感覚と同様排除され〈無視されるべき能力〉であったことはこれまで指摘した通りなのである。他も引用してみると，〈nous pouvons concevoir l'étendue sans figure ou sans mouvement; et la chose qui pense sans imagination ou sans sentiment.（わたしたちは延長をかたちや運動なしに，また思惟するもの（思惟）を想像や感覚なしに理解し得る）〉[47]ことがこの指摘を肯定す

る。すなわちデカルトが〈延長（物体）〉と〈思惟〉を区別していう心身二元論にあっては，その〈思惟〉つまり〈精神 esprit〉に〈想像や感覚〉は必要ないということになる。だからこと〈キマイラ〉を〈想像する〉ことは〈âme〉の〈想像（する）imaginer-imagination〉の自然的能力に委ねられねばならない，そしてここから今問う〈作為観念〉も後段の〈想像〉なる意味を考えあわせると，〈esprit〉ばかりか，〈âme〉ですら可能になるといえるわけである。要するに〈esprit〉の超自然的能力（理性）以外に，〈âme〉の自然的能力（想像）による〈作為観念〉のあることが認められてよいのである。

しかしこの〈想像〉は〈作為観念〉をそれとして完璧に成立させる能力となるのかどうかである。なるほど〈âme〉の〈想像（する）imaginer-imagination〉は〈思惟〉の一で能動である以上，〈作為（する）faire〉に相当しようが，それでも〈作為〉のすべてに換言され得るのではないと察知される。〈作為〉の真価は，デカルトに〈想像に手助けされた悟性〉とも語られているならば，〈想像〉より，同じ〈âme〉の〈思惟〉中の〈思惟〉であるこの自然的悟性（知性）もしくは自然的理性になくてはならぬはずである。これは何も〈esprit〉がその〈思惟〉に〈je ne suis donc, précisément parlant, qu'une chose qui pense, c'est-à-dire un esprit, un entendement ou une raison.（それゆえわたしとは，正確にいえば思惟するもの，すなわち精神，すなわち悟性（知性），あるいは理性でしかない）〉[48]，超自然的悟性（知性）もしくは超自然的理性を配置するだけのことをさすのではない。しかも〈esprit〉においてその〈作為観念〉の原動力はこの能力を除いてない。だからこのことが超自然的でなく，自然的と理解する〈âme〉の諸能力に適用される（これはのちに〈もの〉を問うときに証明してみる）。さらにその諸能力のなかでは〈esprit〉と同じように自然的悟性（知性）もしくは自然的理性が優先されるし，この能力によってこそ〈âme〉の〈作為観念〉も可能になるといわねばならぬのである。そのとき〈想像〉は，〈想像に手助けされた悟性〉とある通り，この自然的理性に橋渡しする役目を担う能力であるとともに，それ自身が後段にて明かすごとく，自然的悟性（知性）や理性の特徴を内包する能力であるからして，〈作為観念〉に与し得るわけである。

なお以上から，次のことがいえる。まず〈esprit〉と同様な諸能力が超自然的と自然的との違いはみられども，〈âme〉にもあること[49]が証明されたとい

える。次に註(47)中の〈かたちや運動〉は引用文ⓥの〈これらの表象〉という指示形容詞のさす〈大きさ〉や〈運動〉に充当し，その〈延長（物体)〉が〈かたちや運動なしに〉理解され得ることは〈物体〉が何より見える〈もの〉（現実の事物）だからして，〈esprit〉では排除されるのとは反対に，身体の想像と感覚にかかわり，〈âme〉でこれらに即座に対応し働きかける〈想像や感覚〉によってであるといえる。そしてなおも〈かたちや運動〉が何かを正しく認知しようとするならば，その見る感覚（あるいは想像）が〈âme〉としての〈想像〉(あるいは〈感覚〉) や〈悟性（知性）あるいは理性〉につながるといえるであろう（この身体の感覚や想像に〈âme〉の〈想像 imaginer〉が〈間接〉に働きかけるとき，両者の間には〈記憶〉が介在するし，〈直接〉に働きかけるときもあったことはまたのちに問題とするであろう)。

さらに〈作為観念〉が〈esprit〉や〈âme〉で可能になるというは，〈想像する〉の一方の〈se représenter〉でも明らかにされよう。この代名動詞には〈penser〉の意味がある[50]という（ちなみに〈imaginer〉も〈思惟する〉[51]と受け取られる。だから〈imaginer〉はまさに〈思惟する〉点で自然的悟性（知性）や理性につながり得る，もしくはこれと同意にみてよい能力である以上，ここにⓦ①の代名動詞と〈imaginer〉について触れるだけでも，〈imaginer〉ですでに語ったことは再確認できるはずである)。それではⓦ①をみることにしよう。すると〈わたしが人間，キマイラ，天（空)，天使，神をさえ想像する（se représenter)〉と，また〈わたしが山羊を... キマイラを想像する（imaginer)〉と記されるにあって，その代名動詞と〈imaginer〉のそれぞれの目的語を，筆者が前段で指摘した〈見えるもの（現実の事物)〉かどうかで区分することができよう。もとより〈見えるもの（現実にあるもの)〉は，〈人間×天空×山羊〉であり，超現実だけにしかないものは，〈キマイラ×天使×神〉(もしくは後者二つに類していう〈天〉) になる。現実にある〈もの〉はまずは身体の感覚か身体の想像かによって，〈âme〉に受け入れられる。それゆえ現実にある〈人間×天空×山羊〉を〈âme〉が〈se représenter〉や〈imaginer〉するは，それらがおのおの〈想像する〉はむろんのこと，〈思惟する〉もかねているからこそ，その現実の事物を〈作為〉できるのであって，要はその観念（表象）を〈âme〉に表出させる〈作為観念〉の形成に役立つということである。他方超現実だけにしかない〈もの〉に対しては，〈esprit〉

が当初より呼応し，その超自然的理性を働きかけるほかない。それゆえ超現実だけにしかない〈キマイラ×天使×神×天〉を〈esprit〉が〈se représenter〉するは，この代名動詞が〈esprit〉の〈思惟〉中の〈penser〉自体にもはやなるしかないからして，それ自身をして超現実だけにしかない〈もの〉を〈作為〉せしめねばならなくなること，要はその観念（表象）を〈esprit〉に表出させる〈作為観念〉の形成に役立つということなのである。

しかしⓤ①での〈わたしの精神（esprit)〉による〈キマイラ〉に対して，ⓦ①ⓑでの〈imaginer〉に関連し記される〈キマイラ〉とは，別言すると〈âme〉にあると語られる後者の〈キマイラ〉とは何かである。少なくも後者は，前者の超現実だけにしかない〈もの（キマイラ)〉と同じか，はたまた〈山羊×人間×天空〉のように，現実にある〈もの〉か，それとも空気や紫外線の例のように，現実にある〈もの〉であるが，現実に見えない〈もの〉なのかが質されなければならない。まず，〈âme〉における〈キマイラ〉が〈esprit〉における〈キマイラ〉と同じにみることは可能か。可能になると，それは超現実だけにしかない〈キマイラ〉が何せ現実にある〈もの〉ともなるし，おそらく現実にある〈もの〉しか対象としない〈âme〉において，ⓦ①ⓑの〈imaginer〉や同ⓐの〈se représenter〉なる〈想像〉がたとえ〈penser〉と同意に見立てられても，この〈想像〉のみによる〈âme〉上の〈作為観念〉として，あたかも完全な，〈キマイラ〉をはじめ〈天使×神×天〉さえもつくりあげることになるからである。そうであってはいわずと知れたこと，〈esprit〉での超自然的理性をもって，わけても〈神〉の〈作為観念〉から〈生得観念〉に到らんとする，いわゆる〈真理の探求〉の提唱はデカルトにおいて必要ではなくなる。それでは〈âme〉における〈キマイラ〉は〈esprit〉の現実での〈キマイラ〉ではないとしても，現実にある〈もの〉なのか，かつ現実に見えない〈もの〉となるのか。筆者はしかし，〈キマイラ×天使×神×天〉が現実にある〈もの〉でも，現実に見えない〈もの〉になるのでもないと断わる一方で，この〈âme〉における〈キマイラ〉が現実にある〈もの〉か，現実に見えない〈もの〉かについては，何より〈想像する〉と同意の〈se représenter〉を含めた〈imaginer〉が一見されたのちに答えてもおそくはないといわねばならぬのである。

〈imaginer〉にも〈sentir〉と同様，〈直接〉と〈間接〉に働きかける〈想像する〉があった。筆者がそこに立って推察するに，〈直接〉の場合，現実にあ

る〈もの〉(それはまたこの対象が受け入れられる身体の想像であるといってよい)に働きかけるのが〈âme〉の〈imaginer〉がゆえに,〈想像する〉は現実に(ある〈もの〉に)かかわるのであり,その現実に見えない〈もの〉(たとえばどこの生まれの山羊か)を〈想像する〉ことはできるはずである。何しろこれが〈âme〉にあって思いをはせ描くという〈imaginer〉の特色であるのだから。しかし〈直接〉での〈imaginer〉が現実に(ある〈もの〉に)かかわる能力であるとしてみれば,この能力でいかに例の〈キマイラ〉に思いをはせ描こうが,その〈キマイラ〉はもとより現実にある〈もの〉ということはできないし,かつ〈キマイラ〉を現実に見えない〈もの〉の一に括ることも不可能であろう。それゆえ〈直接〉において,ⓦⓘⓑの〈キマイラを想像する〉試みをなすにしても,この〈imaginer〉は必ず現実にある〈もの〉にかかわることが条件であるかぎり,〈キマイラを想像する×作為観念〉は実りあるものとはならない,いや現実にない〈もの(キマイラ)〉を〈imaginer〉で作為することは無益でさえあるといわねばならぬのである(ただしこの〈現実〉にかかわる条件を満たしているならば,〈直接〉における〈imaginer〉による〈外来観念〉は可能であろうし,この〈キマイラ〉以外の〈山羊を想像する×作為観念〉がまた〈直接〉で可能なのも後述する時間においてであろう。その際〈外来観念〉と〈作為観念〉は前者がたんに〈想像する〉,後者が〈penser〉的に〈想像する〉ところに違いを見出せ得よう)。一方〈間接〉の場合,〈âme〉の〈imaginer〉は,同じ〈âme〉内にある〈記憶〉に働きかけるからして,現実にある〈もの〉(それはまたこの対象が受け入れられる身体の感覚や想像であるといってよい)に当初よりかかわることがない。〈記憶〉はこの現実にある〈もの(身体の感覚や想像)〉の〈記憶〉である。その〈記憶〉に働きかける〈imaginer〉は,何より〈記憶〉を介して現実にある〈もの(身体の感覚や想像)〉を〈想像する〉ことになるから,かかる〈もの(身体の感覚や想像)〉に対して〈直接〉ではなく,〈間接〉にしかかかわれないのである。〈間接〉にかかわるとは,〈imaginer〉をして現実にある〈もの〉と,ましてや現実に見えない〈もの〉と無関係たらしめることである。それゆえこの〈間接〉において,〈imaginer〉は現実とかかわることなく,例の〈キマイラ〉をはじめとする空想的幻想的な〈表象〉をあたかも自由に〈想像する〉ことができるようになるし,その〈表象〉に〈penser〉的な思いをはせ描く作

為に至るならば，当然〈imaginer〉による〈作為観念〉を形成させることも可能になるはずである（ただし〈間接〉での〈作為観念〉も〈直接〉の場合のそれと同様，不完全な観念にとどまるしかないであろう。それは〈作為観念〉が〈想像〉によるだけでは，いまだ自然的悟性（知性）や自然的理性による〈作為観念〉に達していないとみることができるからである)。

以上から〈âme〉における〈作為観念〉には二種類のそれのあることが判明した。すなわちこれらは，〈âme〉の〈imaginer〉が身体の感覚や想像と〈直接〉ないしは〈間接〉にかかわって語られるそれぞれである。〈直接〉での〈作為観念〉は〈imaginer〉による〈外来観念〉との関係なしに生じたり展開されたりはしないであろうし，〈間接〉での〈作為観念〉はその〈外来観念〉とは無関係に生じ展開されるであろう（だから〈直接〉でみられた〈imaginer〉による〈外来観念〉は，〈間接〉ではないといってよいことになる)。だが〈作為観念〉はこれらの種類に終始しなかった。ⓤ①にみられる通り，〈mon esprit〉における〈作為観念〉もあったのである。これを加えて，デカルトのいう〈作為観念〉は三種類になるわけである。

そのとき〈âme〉の〈直接〉やとくに〈間接〉での各〈imaginer〉による〈作為観念〉は，どうして〈esprit〉のそれと関係がないといえようか。筆者はこの問いを次なる換言において質す。すなわち〈imaginer〉が〈間接〉にて表象する〈作為観念（キマイラ)〉は〈esprit〉の〈作為観念（キマイラ)〉と同じでないと指摘したからして，これとは別のキマイラになるのかとの換言で問うてみる。先きに結語すると，この〈âme〉の〈キマイラ〉は〈esprit〉の〈キマイラ〉とまったく別のそれではないということなのである。ただそうであっても，〈âme〉において〈esprit〉の〈キマイラ〉が現出されるのでないことは前記したことである（以下の詳細はのちにⓤ②もしくはⓦ②に戻ってさらに確かめるが，ここで筆者が理解するところ，〈キマイラ〉をはじめとする〈âme〉上のあらゆる〈作為観念〉は，その完全を求めるとき，いわば〈esprit〉の登場を仰ぎ，そこにおいてこの〈esprit〉の〈作為観念〉とのつながりを有せずにおれなくなることにある)。

つまりその結語へは次のようにして導かれよう。〈âme〉の〈imaginer〉が〈penser〉的要素を持ちあわせることは，註(51)以外ではすでに触れた〈想像に手助けされた悟性〉という表現から知るごとく，〈想像〉に〈思惟する〉

が，〈悟性〉に〈想像する〉が相互に混入されることの容認なしに肯定できないわけである。そして〈悟性〉が前面に出ようものならば，〈想像〉は〈âme〉内でその自然的悟性（知性）や自然的理性に席を明け渡すことを可能にし，かつこれが〈想像する〉を断ち切って本来の〈思惟する〉だけにあるならば，自然的理性がそこに働きかけることになるといってよいであろう。しかしながらたとえば〈âme〉の〈間接〉における〈キマイラ〉を想像し，さらに自然的理性にかけてみても，それだけではこれも前記した〈完全〉なる，あるいは真理なる〈キマイラ〉は表象されないといい得る。またそれだけでは，〈âme〉と〈esprit〉の各〈キマイラ〉がいまだあることになり，しかもこのことはすでに矛盾を露呈させるにもかかわらず，さらに〈âme〉の〈キマイラ〉を不完全にさせることで，はなはだしい矛盾をかたちづくらせる。だから〈esprit〉（心身二元論）での，また〈âme〉（心身合一）での〈キマイラ〉が個別にそれぞれで立てられても，この矛盾を回避させるにはどうすべきかなのである。

こと〈âme〉に〈キマイラ〉なる〈作為観念〉があると語られるかぎり，別言すると個別で不完全な〈キマイラ〉にとどめさせないようにするかぎり，この場合は何より，〈âme〉に想像と自然的悟性（知性）や自然的理性があることを重視せざるを得ないのである。これらが軽視されてはもとより，〈âme〉で〈作為観念〉が試みられる必要はない。しかしてかりに〈âme〉での〈作為観念〉がそこにおいて完全となるならば，〈esprit〉での〈作為観念〉を可能にしよう超自然的悟性（知性）や超自然的理性は必要でなくなろう。そんなことはあり得ない。それでは心身二元論の，また心身合一の諸能力さえ成り立たなくなる。そこで筆者は，デカルトがかのⓦ①における〈わたしがキマイラを想像する〉の〈想像する〉という表現に際して，一方に記される〈imaginer〉だけでなく，他方になぜあえて〈se représenter〉が用いられたかは，少なからずこの代名動詞がまた〈esprit〉の〈作為観念〉につながる緒をもたせられることになったからであるといわねばならないのである（何しろ〈imaginer〉自体は〈esprit〉の一能力に数えられるにしろ，その実際の働きかけはなかったことはもはや説明したところである）。それゆえ筆者にとって，デカルトのいう〈les choses que nous concevons très clairement et très distinctement sont toutes vraies.（わたしたちがきわめて明晰に判明に理解するものはすべて真である）〉[52]は，このことを明かす例文に相当しよう。もちろんその文

章はいわゆる〈真理の探求〉の意に真先きに適合されるし，この〈理解する〉は〈esprit〉の超自然的悟性（知性）や超自然的理性によって獲得されることに誰も異を唱えたりはしないであろう（その場合でも筆者は，〈esprit〉の超自然的悟性（知性）を〈きわめて明晰に理解する〉に，この超自然的理性を〈きわめて判明に理解する〉に該当させる)。だが〈âme〉と〈esprit〉が関係する，換言すると後者の超自然的理性が前者の自然的理性に働きかけるということにおいて，筆者は註(52)の〈きわめて明晰に判明に理解する〉と記されるなかでのまだ完全なる理解ではない〈きわめて明晰に理解する〉が自然的理性によるのであると，かつ〈きわめて明晰に理解する〉に達すると，〈きわめて判明に理解する〉べく，完全な理解を可能にさせる超自然的理性が働きかけずにいないと捉える（そうなるのはなぜかは次回にプラトンと比較させて検討することになる。要はこのつながりを可能になすのは，〈esprit〉のとりわけ超自然的理性が優先的に〈âme〉に関係する，そしてまたこれが筆者のいう〈独自の理性〉[53]であるからだと指摘するにとどめておく)。

それにしても〈esprit〉と〈âme〉が関係したり，このそれぞれが〈作為観念〉を有したりすると推察し得る証しはどこに求められるのか。筆者は少なくも，一にデカルトの記す〈chose（もの)〉という語（その使い方）にある，かつ二にⓦ②とⓤ②というデカルトの考え方にあると断じたい。まず一にあっては，〈もの〉はときに〈esprit〉と〈âme〉の両方をいっしょにして表現する語になると捉えられるからである。その代表にはこれまでの引用文を例に取り上げると，すでに説明した註(52)中の〈les choses〉が，それでなければⓦ①の〈les images des choses〉の〈les choses〉が，それでなければ前回の〈une chose qui pense〉と〈Je suis une chose qui pense〉中の各〈une chose〉[54]が該当するであろう。これらの〈chose（もの)〉に〈esprit〉と〈âme〉があることは，そのうちの最後にある〈わたしは思惟するもの〉という文章を例にしても確認されよう。要はデカルトがいわゆる〈真理の探求〉（心身二元論）[55]と〈日常的用法〉（心身合一）を個別に成り立たせたいと意図すればするだけ，この文章に前者の精神すなわち〈esprit〉が，後者の精神すなわち〈âme〉が同時に含まれていなければならないということである。そこにはだから，〈esprit〉としての〈わたし〉や諸能力ばかりか，〈âme〉としての〈わたし〉や諸能力があると理解してよいことにる[56]。デカルトが〈日

常的用法〉も打ち出さんとするかぎり，いったいこの用法上の〈もの〉を，つまりは〈âme〉ならびにその〈わたし〉や諸能力をどう表現し盛り込ませるかは，この文章（その〈chose（もの）〉）以外にないと察知されるのである。〈もの〉は精神・わたし・諸能力でもあるからして，その一方の〈わたし〉がいわゆる〈真理の探求〉における〈わたし×神×事物〉（ⓦ①では〈キマイラ×天使×神×天〉）を，その他方の〈わたし〉が〈日常的用法〉における現実の事物（ⓦ①ではそこでいう現実にあり得ずかかわらない〈キマイラ〉を除いた〈人間×天（空）×山羊〉）をめざすことと同意なのである。めざすとは各用法の各〈わたし〉（または各精神）をして，たとえば各〈事物〉が何かを〈作為〉させることであり，その各〈わたし〉（または各精神）の諸能力がこの原動力となって各〈事物〉に働きかけることである。この諸能力はまた，いわゆる〈真理の探求〉における想像や感覚のように，実際に働きかける〈もの〉になるかどうかは別にして，すべて〈思惟する〉と一括していう諸能力に組み込まれる以上，この諸能力は少なからず，いわゆる〈真理の探求〉での超自然的諸能力と，〈日常的用法〉での自然的諸能力とに区別されなければならない，だから各〈思惟するもの〉とはそれぞれの〈わたし〉や〈精神〉になっていなければならなくなるというわけである。

だがこの〈chose（もの）〉になぜ〈esprit〉と〈âme〉の両方が含まれるといえるのかにあって，確固とした証しを見出したくば，それはデカルトが〈もの〉の語を使い分けることにあるとみるほかないからである。これまで取り上げた引用文のうちの他のそれで語れば，こうであろう。すなわちⓤ①ⓑの〈une chose〉は文脈から〈esprit〉のみに，同ⓓ中の〈quelques choses〉は文脈から〈âme〉のみに，註(47)の〈la chose qui pense〉と註(48)の〈une chose qui pense〉はいずれの文脈からも〈esprit〉のみにおける〈もの〉でしかない。するとこれらの例によって，同じ語〈chose〉にかかる〈esprit〉と〈âme〉の意が盛り込まれていることは，もとよりそこに二つの精神の使い分けを可能にすると捉えおく必要があるとともに，この使い分けは各精神がもともと個別にあるということを，したがっていわゆる〈真理の探求〉と〈日常的用法〉の各精神（あるいは各〈もの〉）として用いられてよいことを明示させている。かつ使い分けが可能であることは，〈もの〉が両方の精神をいっしょにして表現する語であることも考慮にいれては，精神が個別だけに

とどまらずして，その個別を新たにあわせもつかたちにて形成されていることをも含意させておかねばならぬのである。なんとなれば〈もの〉が両精神をあわせもつというかぎり，〈もの〉は個別のそれではない新たな精神でなければならないし，両精神を兼ね備えた精神（筆者はこの精神を鉤括弧抜きのesprit とみる）もまた〈同じ一つの精神（esprit)〉[57]，あるいは同じ一つの〈わたし〉，あるいは同じ一つの諸能力でなければならないといえるからである。

このとき筆者は，〈Je suis une chose qui pense〉の〈chose（もの)〉には新たな精神の意も含まれると，換言すると新たな精神が三つ目の〈もの〉として暗に用いられるとみたいし，このことを明かすのが〈作為観念〉であり，筆者が〈二に〉と前記し取り上げた引用文ⓦ②とⓤ②であると結語できる。だが新たな精神において，なぜ〈作為観念〉が持ち出されるのか。筆者はすでに〈作為観念〉がいわゆる〈真理の探求〉と〈日常的用法〉のそれぞれで生じるといい，そのうえで各用法が関係すると主張した。だから〈作為観念〉が各用法になく，かつ各用法を関係づけないとするならば，一方の用法の〈âme〉の〈外来観念〉と他方の用法の〈esprit〉の〈生得観念〉とにはいかなるつながりも求められないであろう。

これをかの例〈わたしとは思惟するものである〉[58]に託していえば，以下のごとくになる。この文には〈もの〉が〈esprit〉や〈âme〉のいずれに用いるとの明記がないために，〈もの〉は両精神に該当されずにおれない。〈もの〉はまた各精神が当然精神とみなされなければならぬからして，精神を成り立たせる諸能力が，たとえば知・情・意を可能にする諸能力が各精神に過不足なく配置される諸能力である必要がある。ここから筆者は，デカルトが各精神や各諸能力の特徴，つまり超自然的または自然的特徴を織り込ませた使い分けをしていると，別言すると両精神や両諸能力をときに〈esprit〉用，ときに〈âme〉用として用いると捉えることはもちろん，しかしてそれだけにとどまらずに，両用をいっしょにみることすら可能にさせるのが，かの例の語ることであると断じるわけである。そこでおよそかの例に，いわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉（この精神は〈chose（もの)〉の一意たる〈者〉としての，〈事物（身体)〉性を欠いた超自然的〈わたし〉である）のほか，〈日常的用法〉の〈âme〉（この精神は〈chose（もの)〉の他意たる〈事物（こと)〉としての，〈事物（身体)〉性を有する自然的〈わたし〉である）もあるといい得るのだ

から，どうしてそこに新たな精神（上記の両精神を一にしての〈わたし〉）があると認められないことがあろうか。筆者のいう真の心身合一を可能にするこの新たな精神が認められずして，それではどうしてかの例に〈日常的用法〉を含めることができるのであろうか。

とまれこの新たな精神を容認するといえるのは筆者にあって，〈作為観念〉があること，しかも何より〈日常的用法〉に〈作為観念〉があることによってである。〈作為観念〉が〈âme〉で試みられることは，まずは〈間接〉における想像が，それから自然的悟性（知性）や自然的理性が〈現実にあるが，現実に見えない〈もの〉〉に対して〈作為〉しなければならぬことからいい得よう。それは〈キマイラ〉を例にしてすでに触れたように，〈âme〉の〈作為観念〉が〈esprit〉の〈作為観念〉と関係するからである。かつその関係にあってはじめて，精神は各精神ではないそれ，新たな精神になり得るからである。それなくして精神は各精神のままであり，各精神におたがい個別で無関係な〈作為観念〉があるだけになろう。そのとき一方の〈âme〉の〈作為観念〉自体が完全を望めない〈作為観念〉でしかないことは，しかし不完全なそれであればこそ，完全をきす〈esprit〉の〈作為観念〉が必要となることを，しかし前者が完全なそれであるならば，後者のそれは必要でなくなろうことを予想させる。だからこれを否定するうえでも，かの例に〈âme〉としての〈日常的用法〉が，その〈作為観念〉が，これにもう一つの〈作為観念〉を加えて一にする精神のあることがどうしても必要になってこなければならないのである。

ところで〈âme〉の〈作為観念〉はその発端を〈間接〉での想像に見出すとした。〈間接〉とは，身体の想像や感覚と〈âme〉の〈想像したり感じたりする〉うちでの〈想像する〉との関係が〈直接〉に結ばれないことであった。〈直接〉は〈âme〉の〈想像する〉が現実にある〈もの〉，要するに身体の想像（身体の感覚にでなく，身体の想像にがまた〈直接〉の意となる）だけにかかわることであった。かつ〈直接〉では，〈âme〉の〈想像する〉はたんなる想像，つまり非〈penser〉的要素の想像でしかないために，〈作為観念〉は見出せないが，〈外来観念〉は成り立つと，反対に〈間接〉では，〈âme〉の〈想像する〉は直接現実とかかわらぬとみるがゆえに，〈記憶〉に多分に〈penser〉的要素を注がずにおれない想像になる必要があり，そこからは〈作為観念〉を生じせしめ得ようが，〈外来観念〉を見出せないとみることもできたのである

（この〈作為観念〉からさらなるそれをめざすときは，そこに自然的悟性（知性）や自然的理性が働きかけよう）。また筆者は序でながら，ここで〈直接〉や〈間接〉での〈âme〉の〈想像する〉をもって，デカルトのいう心身合一を，ましてや筆者のいう真の心身合一を可能にする能力に充当させるのではないといっておかねばならない（前者の心身合一は感覚，後者のそれは〈独自の理性〉によって成立したのだから）。

そこでこの〈作為観念〉から〈esprit〉と〈âme〉の複合される新たな精神（esprit）がⓦ②やⓤ②に語られると指摘することが確認される必要がある。これらはいずれも『省察（第三）』にあって，もともとこの順序で記される引用文である。またここに同作品中のⓤ①とⓦ①を持ち出し，それらの順序をいうと，ⓦ①，ⓤ①，ⓦ②，ⓤ②となる。筆者が先きにⓤ①とⓦ①を取り上げたのは，何よりⓤ①をして〈生得観念×外来観念×作為観念〉なる三つの観念（image）のあることを提示たらしめることに，しかしてⓤ①とⓦ①にともに記される〈キマイラ〉を問うことにこそあつたからである。かつ筆者の主張する新たな精神のことが盛り込まれたのがⓤ①にすぐ続くⓦ②であり，デカルトにおいてもその結語と捉えられてよいのがⓤ②であると察知し得るからである。

まずⓦ②である。デカルトはそこで，〈わたしはいまだこれら（三つ）の観念の真の起原を明確にみきわめてはいない〉という。だからこの1641年当時の文章は筆者に，1644年の『哲学の原理』からすでに引用した註(47)で〈わたしたちは... 思惟するもの（思惟）を想像や感覚なしに理解し得る〉と断じるように，それこそ〈みきわめ〉させはしない。別言すると筆者が〈これらの観念の真の起原〉を認識論的に探るにあっても，デカルトは『省察（第三）』の時期では〈思惟〉からあの〈想像や感覚〉を排除していないとみられるのである。このことはまた筆者に，デカルトが同作品ⓦ②に〈生得的である観念〉と記すうえでは，当然いわゆる〈真理の探求〉を，そればかりか〈日常的用法〉さえ打ち出すことを示唆させずにいない。なんとなればこのⓦ②に〈思惟〉から排除されない一方の〈感覚〉によって，〈外から来る観念〉が，他方の〈想像〉によって，〈わたしによってつくられた観念〉が生み出される〈日常的用法〉なしには，そもそもⓦ②の文章が語られなくなるからである。するとⓦ②は必然的に，三つの観念をあわせ有する精神，換言すると両用法の〈esprit〉と〈âme〉を複合（いっしょに）する精神のあることすら明示しているとみてよ

いことになる。デカルトが〈これら（三つ）の観念の真の起原〉を後日[59]たる『省察（第五あるいは第六)』で存在論的に見出すことで，いよいよいわゆる〈真理の探求〉を明確にしようが，そのことがここで問題なのではない。すなわちこの用法での〈神〉や〈事物〉なる〈生得観念〉の存在論的確証をたどることにあるのではない。この〈生得観念〉をはじめとして三つの〈観念の真の起原を明確にみきわめてはいない〉と記される当のことが，まさに存在論的確証のことであったにしろ（そうでなければなぜ第五で〈神〉の，第六で〈事物〉の存在が問われる必要があったのか)，デカルトが〈car〉の直前でいう〈今のわたしなら，... すべての観念は...（三つの）観念という種類に加わると確信する〉にあっては，筆者はこれこそ〈確信する〉当のことがいわゆる〈真理の探求〉や〈日常的用法〉の各認識論によって生じる観念であることはむろん，この文章は三つの観念をしてそれだけにとどまらない認識論を秘めさせるとみるのであって，これをここでさらに確認するだけが筆者の課題なのである。

前段最後の文章からおよそ推測されよう精神こそ，筆者のいう新たな精神でなければならない。それといえるのもこの文章に従っては，精神はいわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉で生じる〈作為観念〉や〈生得観念〉を，また〈日常的用法〉の〈âme〉で生じる〈外来観念〉を各用法別にではなく，筆者のいう〈âme〉の〈作為観念〉を含めた以上三つの観念がいっしょにある精神としてあらわされると捉え得るからである。〈âme〉の〈作為観念〉が〈esprit〉の〈作為観念〉と密接な関係を有するとみるかぎり，両者のそれが一に数えられ，三つの観念の一となると指摘できるわけである（これは各用法とは別の認識論によって成り立つことを意味しよう)。その一となるは次の通りである。デカルトがⓦ①のここでも〈car〉たる語を付して，〈わたしが山羊を想像するにしろ，キマイラを想像するにしろ，わたしが想像するということはどちらも真である〉と語るところからは，まず〈想像する〉が可能なのは〈âme〉においてであること，次に〈山羊を想像する〉の〈imaginer〉は〈直接〉でのたんなる想像であり，〈外来観念〉の形成にしか効力がないし，〈キマイラを想像する〉のそれは〈間接〉での〈penser〉的要素のある想像であって，〈作為観念〉の形成にこそ役立つ能力であること，そしてこの〈どちらも真である〉とされることは〈直接〉や〈間接〉の想像があると断じられることをさすほか，

こと〈作為観念〉にあっては，これがこの〈真〉なる想像の〈キマイラ〉をして〈esprit〉の〈キマイラ（〈事物〉）〉に結びつかせる〈作為観念〉（ⓦ①の〈se représenter〉あるいはⓤ①ⓔの〈esprit〉はそのためにあるのではなかったか）になることが窺われる。結びつかずば，〈âme〉の想像も〈作為観念〉も無用である，それらは〈真〉でないということになる。〈真〉と記されるかぎり，〈âme〉の〈作為観念〉のあることがここに明らかとなる。

このⓦ①の展開がⓦ②であると前記しておいた。だからⓦ②におけるその展開とはもとより，デカルトが〈すべての観念は...（三つの）観念という種類に加わる〉とみたことにあろう。〈すべての観念〉は筆者のいう〈直接〉や〈間接〉での感覚や想像，自然的悟性（知性）や自然的理性による観念を含めた，要はいわゆる〈真理の探求〉だけでない観念であろう。そしてそうなると，これらの観念が〈加わる〉三つの観念をともにする認識論が，その精神が必要となってくるわけである。そしてまた筆者は，この新たなといえる精神がシモーヌ・ヴェーユではないが，確かに〈不明瞭，難点，矛盾〉になるとみられども，デカルトにとっては彼のねらいであったと，かつデカルトはその一例として，いわゆる〈真理の探求〉をばとくに『省察』の第五や第六で，あるいは『哲学の原理』で，〈日常的用法〉をばとくに『情念論』（1649年）で説くにすぎないと推察する。

さてⓦ②の〈すべての観念は...（三つの）観念という種類に加わる〉という文章自体の意は何かである。この文章は，先きに問うた〈すべての観念〉のうちのどれもが〈外来観念×生得観念×作為観念〉のいずれにもなり得ることを，いずれになっても，これが〈外来観念〉か，また〈作為観念〉かから出発し，最終的にその〈生得観念〉を経ずして完全にならぬことさえ示唆させていよう。だから〈すべての観念〉のある一つのそれには，完全を欲するとき〈âme〉としての〈外来観念〉と〈作為観念〉が，かつ〈esprit〉としての〈作為観念〉と〈生得観念〉があって不思議ではない。だからまた一つの観念は，単独での使用といってよいいわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉か，〈日常的用法〉の〈âme〉かではみられはしない新たな精神において形成され，そこで成立される観念でなければならないと捉え得るのである。このことは新たな精神の方からいうと，〈esprit〉と〈âme〉をいっしょにした精神でしかない。それゆえ新たな精神をかたちづくるうえでそのつなぐ役割を担うのは，

〈âme〉の〈penser〉的要素のある想像，つまりは〈間接〉におけるその〈作為観念〉になるというわけである。そしてその〈作為観念〉に関し具体的な例を提示して，結語をみせるのが，ⓤ②であるというわけである。

デカルトはこのⓤ②において，〈直接〉でのたんなる想像による〈外来観念〉以外の〈感覚から引き起こされる観念〉や〈生得観念... さもなければ，いかなる観念であろうと，わたしによってつくられる（作為観念)〉と記して，〈太陽〉はそれらから〈見える〉という。しかも〈mon esprit〉がそれら三つの観念を可能にするという。そのとき〈わたしの精神〉の〈esprit〉は果たして，いわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉か，それとも筆者の指摘する新たな精神としての esprit と捉えるべきかである。これをかりに前者の精神とみなすと，心身二元論が前提であるこの〈esprit〉に〈外来観念〉が取り入れられてあることになる。それはこの精神における用法を〈矛盾〉に陥らすほかなくさせる。そうではなく，デカルトが〈外来観念〉を esprit に関連させ他の観念といっしょに扱うとみるからして，この esprit はいわゆる〈真理の探求〉のそれではない新たな精神でなければならないのである。デカルトがⓤ②でこの〈esprit〉の語しか用いないかぎり，そこに新たな精神の意を esprit として充当させることができるわけである。だから『省察（第三)』は新たな精神が彼のねらいにあったことを明らかにさせるといえるのである。

〈外来観念〉を〈esprit〉に関連させ他の〈観念〉とともに扱うのは，〈いかなる観念であろうと，わたしによってつくられる〉という文章の解釈による。この解釈では，〈いかなる観念〉の〈いかなる〉とは〈外来観念×生得観念×作為観念〉をさすことになる。それら三つの観念が結局〈わたしによってつくられる〉からである。だから〈わたし〉は〈âme〉と〈esprit〉をいっしょにしたわたしとなる。ところで筆者がこの解釈に執拗にこだわりをみせてもそのままにしておくならば，またⓤ②の〈太陽のまったく異なった二つの観念〉の一方を〈日常的用法〉の〈âme〉における〈外来観念〉に，その他方をいわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉における〈生得観念〉ないしは〈作為観念〉に見立ておくだけならば，たんに個別にあろう〈外来観念〉での〈âme（わたし)〉と〈生得観念〉か〈作為観念〉かでの〈esprit（わたし)〉とになるばかりか，その各観念が〈わたしによってつくられる〉にせよ，各〈わたし〉の各観念はいっしょに扱われるとみられることはないであろう。これではたとえば〈外来

観念〉を〈生得観念〉や〈作為観念〉に展開させるようなつながりは，この三つの観念になくなるといえてくるのである。

しかしⓤ②は三つの観念をつながらせ，各観念をともに扱い得る新たな精神になることを確実に記すのである。だからⓤ②に何より，かかる新たな精神が見出せるということは，もとより〈不明瞭，難点，矛盾〉にはちがいないにしても，デカルトがいわゆる〈真理の探求〉とその〈esprit〉や〈日常的用法〉とその〈âme〉を個々に主張したにとどまるねらいだけでなく，かの新たな精神（esprit）なくして，デカルトの真のねらいにはならなかったことを示唆する。

以上の証左はいうまでもなく，先きに掲げた〈太陽のまったく異なった二つの観念〉から捉えられてこよう。ⓤ②ではまず，感覚で〈太陽〉を見てもたらされる〈外来観念〉が〈一方の（太陽に関する）観念〉である。この〈外来観念〉を持ち出すことは，そこに〈日常的用法〉とその〈âme〉があり，そのもとでの観念であることを確実にする。それゆえこの〈太陽〉は当然現実にある〈もの（現実の事物)〉となる。しかしこの〈太陽〉を見るだけでは，〈太陽〉は〈科学〉すなわち〈天文学〉にかかわってこない。そしてこの〈太陽〉を〈天文学〉として見る，つまり〈推論〉する（あるいはこれまでの語では〈理解〉するや〈思惟する〉）ことによって獲得し得る〈生得観念〉か〈作為観念〉かが〈他方の（太陽に関する）観念〉である。この〈生得観念〉や〈作為観念〉を持ち出すことは，そこにいわゆる〈真理の探求〉とその〈esprit〉があり，そのもとでの観念であることを確実にする。そこでの〈生得観念〉と〈作為観念〉は関係するのであり，これらの関係は，完全に〈作為〉するに至る〈作為関係〉が〈生得観念〉になることにある。またこれらの観念には感覚や想像が加味されることもない。かかる諸能力は，たとえばⓤ①でみる〈生得観念〉や〈キマイラ〉における〈作為観念〉にあっては〈わたしの本性そのもの〉すなわち〈思惟〉として組み込まれてあるが，いずれも両観念の形成に対しては無用になるのである（なおⓤ①自体は観念の名称やその種類と特色を提示した文章と捉えおく)。それゆえあの〈太陽〉は筆者からいうと，超現実だけにしかない〈もの〉，換言するといわゆる〈真理の探求〉でめざす〈わたし×神×事物〉のうち〈事物〉となる。あの〈太陽〉はこうした〈もの〉であるだけに，〈太陽〉を見るにはこの〈もの〉を〈思惟する〉以外にない。この〈太陽〉を

〈思惟する〉ことはだから，〈科学〉すなわち〈天文学〉にかかわらざるを得なくさせる。

ところが三つの観念がつながると指摘する際，〈外来観念〉が〈生得観念〉や〈作為観念〉に直結するのでない，つまり現実にある〈もの〉なる〈太陽〉を見ることが即座に，超現実だけにしかない〈もの〉なる〈太陽〉を〈思惟する〉ことにつながるのではないことが今度は注意されるべきである。確かにこの〈生得観念〉や〈作為観念〉にとってはⓤ②において，〈見える×太陽〉の〈大きさ〉を〈思惟する〉ことにあるのだから，その〈外来観念〉が無視されているわけではない。しかしながらその〈外来観念〉では，現実にある〈太陽〉が実際〈見える〉だけの〈もの〉であることをさしつつも，この〈大きさ〉の正確な数値を算出することは不可能なのである。そしてこの数値はまさに現実に見えない〈もの〉に相当しよう。要はこの現実に見えない〈もの〉は〈外来観念〉で処理できないし，そこからもはや食み出した〈もの〉となっているということである。だから現実に見えない〈もの〉は正確でなくとも多少なりに〈見える〉まで，〈思惟する〉すなわち〈作為する〉しかなくなろう。だがこの〈作為する〉は，上記した超現実だけにしかない〈もの〉を〈思惟する〉とは異なる〈思惟する〉でなければならない。これはとどのつまり，〈âme〉における〈思惟する〉である。それゆえ〈外来観念〉が〈esprit〉の〈生得観念〉や〈作為観念〉につながるには，何よりもまず〈外来観念〉なかりせば生じない現実に見えない〈もの〉を〈âme〉の〈思惟する×作為観念〉に結びつかせること，そのうえでかかる〈作為観念〉を〈esprit〉の〈思惟する×作為観念〉に橋渡しすることが欠かせなくなる。別言すると〈外来観念〉における現実に見えない〈もの〉は〈âme〉の〈作為観念〉に受け継がれるからして，この〈作為観念〉を通さずに，〈âme〉の〈外来観念〉は〈esprit〉の〈生得観念〉や〈作為観念〉につながらないということなのである。

デカルトはⓤ②で〈二つの観念をわたしの精神（mon esprit）のうちに見出す〉と断じるが，しかし〈外来観念〉がそもそも〈mon esprit〉に取り入れられてあるとするは，心身二元論としての〈esprit〉にとって，まぎれもなく〈不明瞭，難点，矛盾〉なことである。デカルト自身がそう思わなかったとすれば，上記引用文にはデカルトのねらいがあるのではなかろうかということなのである。だから筆者は，〈âme〉の〈外来観念〉が〈esprit〉で捉えられ

ることはない，またすぐに〈esprit〉の〈生得観念〉や〈作為観念〉につながることはない（この二つの観念が〈esprit〉にて生じることはⓤ②の〈わたしによってつくられる〉ことによるだけでなく，ⓤ①も記すところである），かつ筆者の見方でしか〈わたしの精神のうちに見出す〉ことが許されない，そうなるのも〈わたしによってつくられる〉とする〈わたし〉すなわち〈esprit〉の見方にかかわってくると指摘したのである。〈âme〉で生じる〈外来観念〉がまず〈âme〉の〈作為観念〉につながるとみてよいことをもう少しⓤ②に添っていえばこうであろう。筆者が現に〈太陽〉を見ていて，〈太陽は非常に小さいように見える〉という〈外来観念〉を得るとする（この〈小さい〉を筆者は〈作為観念〉とみない。〈作為観念〉と捉えるならば，デカルトが〈外来観念〉を立てるなどは無用になろう。これは身体の感覚（視覚）のもたらす表象を〈âme〉の sentiment として〈直接〉受容していう〈外来観念〉（受動）とみなすべきである)。だがその〈外来観念〉だけにとどまったり，また別の対象のそれが生じたりするであろうし，ときたま筆者に，あの〈太陽〉に見えない〈もの〉は何かとさらに〈感じる〉場合が，またあの〈太陽の大きさ〉はどんなであるかと〈外来観念〉と同じ〈âme〉の土俵に位置してさらに問う，要するに〈思惟する〉場合があってしかるべきであろう。そしてこの〈思惟する〉ことは〈âme〉に〈作為観念〉をもたらすことになるわけである。〈思惟する×作為観念〉が〈âme〉にみられることはまた，その諸能力が〈受動〉や〈情念〉ばかりでなく，能動的諸能力さえさすとこれまで語った[60]ことでも諒解できよう。この能動的諸能力なくば，いくら〈âme〉といえども，これらがない〈âme〉は精神といわれないし，精神ではなくなるのである。すると〈日常的用法〉は果たして成り立ってくるのか，これは〈受動〉や〈情念〉だけに終始しよう用法なのか，そうではあるまい。

とまれその能動的諸能力が〈âme〉にあることを確認しておこう。どんな大きさかと〈思惟する〉ことは何より〈想像する〉ことでなければならない。かつ〈想像する〉は〈esprit〉ではなく，〈âme〉でのみ働きかけることを許された能動的能力であり，すでにして現実に見えない〈もの（大きさ)〉に対処し得る〈作為観念〉となっていなければならない。なんとなれば〈想像（する)〉は，そこに〈penser〉的要素を有するがゆえに，〈間接〉におけるそれであり，当初より〈作為観念〉をば生み出さざるを得ない能力となっているからである

（ちなみに〈直接〉における〈想像（する）〉はたんなる想像となって，その〈外来観念〉を生み出すに役立つし，〈âme〉の sentiment は〈直接〉では〈受動〉，〈間接〉では〈情念〉なる〈外来観念〉をもたらすことはすでに記したことである）。

そして現実に見えない〈もの（太陽の大きさ）〉をさらに〈思惟〉したくば，〈想像に手助けされた（自然的）悟性（知性）〉や，〈きわめて明晰に理解する〉自然的理性が作用するであろう。自然的想像・悟性（知性）・理性がこうした一連のかかわりにあるとみるがゆえに，これらの能力の作用を含ませることなくして，デカルトは〈âme〉を〈日常的用法〉用に仕立てたり，いわんや精神といったりすることを明言せずにおれないであろう。何しろ〈âme〉のなかでときに最後に作用しよう自然的理性が欠けては，そこに〈きわめて明晰に理解する〉だけにとどまらずにある〈判断〉や〈意志〉は〈日常（的用法）〉のどこで用いられんとするか不明になろう。これらもまた〈理解する〉と同様，自然的理性の範疇なる能力であり，〈作為観念〉に関与し得る能力とならねばならぬのである。

この〈作為観念〉には，〈直接〉での〈âme〉の想像や感覚による〈外来観念〉をもとに生じる場合が，また〈間接〉での〈âme〉の想像のみによって当初より生じる場合があった（ただし〈間接〉でのその感覚は〈外来観念〉に終始したが，この〈情念〉は〈認識の起こり〉にあって，前段で記した〈判断〉や〈意志〉を必要とした。ここからも〈日常的用法〉に自然的理性が不可欠であるといえる）。筆者はこの二つの〈作為観念〉の場合を三つの観念のつながりのその一つにみる（その際前者の場合の〈外来観念〉にはさらに〈penser〉的要素のある想像が作用するは当然のことである。これもこの想像からすれば〈間接〉となるし，〈さらに〉とはここでも時間（的経過）が予想されるからである）。そればかりか，各〈作為観念〉がそれぞれ，〈esprit〉の〈生得観念〉や〈作為観念〉とのつながりの真因になったのである。

そこでいかにつながるかである。思うに，それはデカルトがいわゆる〈真理の探求〉ではその〈esprit〉の超自然的理性を他のあらゆる能力に優先させたように，三つの観念をともに扱い得る新たな精神を彼のねらいとみなすにあっても，この超自然的理性が，ただし〈独自の理性〉として〈âme〉の自然的理性への働きかけを可能にし，その〈作為観念〉を〈きわめて判明に理解する×

作為観念〉になさざるを得ないということである。〈独自の理性〉になるのは，これが超自然的理性と同じ超自然的能力であっても，その働きかけが後者の能力すなわちプラトン的理性といってよい能力と異なるからであり，それゆえデカルトが独自に唱え得る能力というほかないのである。

だから〈独自の理性〉が働きかける新たな精神は，超現実だけにしかない〈もの（太陽の大きさ）〉に対する〈独自の理性〉の〈作為観念〉と現実に見えない〈もの（太陽の大きさ）〉に対する自然的理性の〈作為観念〉における〈もの〉を〈思惟する〉うえで同じ対象の〈もの〉とし，たんに前者のかかる〈作為観念〉をして太陽の正確な大きさをきわめしめる esprit でなければならなくなる。自然的理性の〈作為観念〉の完全な〈作為観念〉は，二用法の各〈esprit〉や〈âme〉では異なる〈思惟する〉であろうが，ここでは〈âme〉のいわばその深化的〈思惟する×独自の理性〉によって成り立ち，しかも自然的理性の〈作為観念〉たる〈表象〉が esprit で捉えられることを意味させるのである。

前段のことはⓤ②で別言できる。およそ同じ〈太陽〉が〈感覚〉で，また〈推論〉で〈見える〉というデカルトの意図は何か。それは〈推論〉の〈見える〉が〈感覚〉の，すなわち現実にある〈もの〉の〈見える〉に基づくことにあるのではなかろうか。しかりである。だから現実の事物とかかわる〈推論〉は〈独自の理性〉によって可能になると捉えおかねばなるまい。いわゆる〈真理の探求〉の超自然的理性ももとより〈推論〉機能を有しはするが，それでもこれは現実にある〈もの〉にではなく，しかもこの〈もの〉と無関係となる，超現実だけにしかない〈もの〉に向けられるのであり，これをもって〈esprit〉の〈生得観念〉なる〈事物〉を獲得せんと試みる〈推論〉である。ここに両者の〈推論〉の違いが明白になる。加えて，いずれの能力の〈推論〉の結果は〈推論〉すなわち〈作為観念〉が〈生得観念〉に至るにあるにせよ，〈作為観念〉を可能となす〈独自の理性〉からの〈生得観念〉は，実に〈太陽〉または〈太陽の大きさ〉という現実の事物であること，一方かかる超自然的理性からの〈生得観念〉の獲得は，現実の事物にかかわりない，〈生得観念〉なる〈事物〉をたんに〈思惟する〉超自然的理性への依存でしか保証されないことが明かされる。

それにはⓤ②の〈他方の観念〉以下の文章が参考となろう。まず〈天文学と

しての，いいかえるとその生得観念としての推論〉とは〈天文学としての推論〉の結果が〈生得観念〉になる，極論すると〈天文学〉が〈生得観念〉であるという謂でしかない。次にこの〈天文学〉は，〈一方の観念〉を受けて成り立つからして，〈âme〉の〈外来観念〉や〈作為観念〉に関係し〈推論〉せんとする科学（学問）であり，かつ科学としての〈生得観念〉をめざすからして，〈推論（思惟）〉のみで客観・普遍を求め得る能力を，つまり想像や感覚以外の能力を欠かせない。そして〈âme〉にかかわり，〈思惟〉をもって科学するこの〈天文学〉にとって，その二条件を満たす能力はもはやいわゆる〈真理の探求〉における〈esprit〉の超自然的理性ではないということになる。それこそ〈独自の理性〉なのである。超現実だけにしかない〈太陽の大きさ〉の実体を〈推論（思惟）〉する〈独自の理性〉はその〈作為観念〉を通して，現実に見えない〈太陽の大きさ〉の実体にかさねあわせ得る能力となる。それがこの〈天文学〉である。だからこの〈天文学〉は〈太陽の大きさ（現実の事物）〉を真の〈生得観念〉と捉え得るし，〈âme〉と〈esprit〉をいっしょにした新たな精神（esprit）によって可能になるといえるのである。

新たな精神があることは，繰返し取り上げる文章〈いかなる観念であろうと，わたしによってつくられる〉において明かされる。それは〈いかなる〉と書かれるがゆえに，esprit の〈わたし〉はすべての観念を作為し得るからである。すべてとは〈âme〉の〈外来観念〉や〈作為観念〉,〈esprit〉の〈生得観念〉や〈作為観念〉であり，それぞれは〈わたしによってつくられる〉からである。この〈つくられる〉は〈独自の理性〉で実現される。だから〈独自の理性〉の〈作為観念〉の仲立ちで上記三つの観念が関係することが，〈生得観念〉が現実の事物にあることを確実にする。この〈独自の理性〉での〈作為観念〉なしに，筆者のいった自然的理性での〈作為観念〉が，また後者なしに前者がみえてこない。かかる関係にあって，〈独自の理性〉は現実の事物たる〈外来観念〉また〈生得観念〉を〈作為する〉ことになっていく。むろん〈外来観念〉を〈作為する〉は自然的理性に最終的に委ねられようし，〈生得観念〉を〈作為する〉は〈独自の理性〉が自然的理性での〈作為観念〉に働きかけてなお〈生得観念（現実の事物）〉に達するまで〈思惟する〉を課せられようことにある。このもとで現実の事物を〈真理〉となすことが確かめられる。このことはデカルトが語るいわゆる〈真理の探求（心身二元論）〉だけでは，また〈日常的用

法（心身合一）〉だけでは不可能である。もとより前者では〈外来観念〉や筆者のいう〈作為観念〉が，後者では〈生得観念〉が欠落するからである。だがこれらの観念を含ませ，しかして観念論的一元論にみられんとするのが，筆者のいう〈真理の探求（真の心身合一）〉なのである。

〔続〕

付記：以上が拙論小見出し（1-2-2）に，さらに〈独自の理性〉（1-4）に対する解答である[61]。また今回掲げた引用文（ⓥを除く）から，デカルト説にはそれが〈不明瞭，難点，矛盾〉に捉えられようが，新たな精神のあることが判明した。しかしその esprit において，〈独自の理性〉が〈âme〉の自然的理性に働きかけるとはいかにして証明されるか，デカルトの作品をもう少し追いながら，残した問題，たとえばプラトンの精神や理性との比較，三つの観念のつながりという時間，〈同じ一つの精神〉のことなどともに，次回に譲り明らかにさせる。

註

今回の参考文献は以下の通りであり，各註はその文献に付した記号 A.－E. に従う。

A.　新潟大学人文学部人文科学研究
㋑『なぜ感受性なのか』(2)，第93輯，1997年。
㋺　同上(3)，第94輯，1997年。
㋩　同上(4)，第95輯，1998年。
㋥『デカルトにおける理性と感覚』(1)，第96輯，1998年。
㋭　同上(2)，第98輯，1998年。
㋬　同上(3)，第99輯，1999年。

B.　Descartes《Œuvres Lettres》Bibliothèque de la Pléiade. Gallimard.
㋑《Règles pour la direction de l'esprit》.
㋺《Traité de l'homme》
㋩《Discours de la méthode》
㋥《Méditations》
㋭《Les principes de la philosophie》

㋩ 《Les passions de l'âme》
㋛ 《Lettres (à ELISABETH)》

C. Simone Weil《Sur la science－Science et perception dans Descartes－》. Gallimard.

D. Dictionnaire des synonymes analogies et antonymes. Bordas.

E. 『アリストテレス全集』6（『霊魂論』山本光雄），岩波書店

(1) 前回の紀要とはA.㋭である。
(2) B.㋥P.287。
(3) B.㋥P.P.288-289。
(4) C.P.P.46-47（またA.㋑P.29註(15)）。
(5) A.㋩P.47，P.58。
(6) A.㋩P.45（この頁最終行をはじめに，次頁に多数出る）。
(7) A.㋩P.57。
(8) A.㋩P.43。
(9) A.㋭P.63（この頁に記した1-4筆者のいう〈独自の理性〉とは何かについても，今回みることになる）。
(10) A.㋥P.P.35-36。
(11) A.㋭P.P.44-48（1-1〈真理の探求〉における思惟の〈方法〉とは何かでは，〈意志〉や〈判断〉も超自然的理性に組み入れられる能力となろう）。
(12) A.㋧P.50（そこに〈ressentir が働きかけると sens になる〉と記される。この動詞はB.㋑㋺㋧㋥㋭㋩のうち，もっぱら㋥中のP.279第二，P.298，P.300第三，P.320，P.321，P.328，P.331，P.333第六に使用される。またA.㋺Ⓜ②註(19)P.P.7-8にこの例があり，sens に関してはA.㋑ⒶP.35ⒸP.36ⒺP.38の各引用文を参照のこと）。
(13) A.㋧P.50（そこに〈sentiment は〈精神〉に〈働きかけられる〉身体の能力 ressentir（sens）と関係する能力となる〉と記されるし，これはまたP.53の〈sens の sentiment 化である〉といえる）。
(14) A.㋺㋾④P.15参照。
(15) A.㋧P.54（そこに〈sentir の sentiment 化〉と記される）。
(16) この経緯，つまり〈受動〉や〈情念〉の〈日常的用法〉のそれについてはA.㋑㋺㋩を参照，かかる証明は次回以降の予定。
(17) B.㋺P.P.851-852。

(18)　A.㊐P. 4 とP.23の註(7)。

(19)　A.㊐P. 9 。

(20)　B.㊀P.706 ART 21。

(21)　B.㊀P.705 ART 20。

(22)　この段落より四つ前の段落中の「また〈外来観念〉において」ではじまるうちに，筆者が「〈意志〉と〈判断〉とに...〈sentir〉が働きかけるとき」と記したこと（A.㊁P56とくに〈意志〉を語るP.58を参照のこと。これは次回以降今一度検討されよう）。

(23)　この〈直接〉や〈間接〉に関してはすでにA.㊀P.P.63-64でみている。

(24)　B.㊐P.851。

(25)　身体の感覚が記憶として受容されることはA.㊀Ⓐ P.35参照。また註(27)をみよ。

(26)　B.㊀P.P.715-716 ART 42参照。

(27)　B.㊀RÈGLE XⅡP.79〈la mémoire, celle au moins qui est corporelle et semblable à celle des bêtes, n'est en rien distincte de l'imagination（少なくとも身体的で野獣の記憶に似ている記憶は何ら想像と別のものではない）〉参照。これによれば，身体の想像と記憶は同じものとなろう。

(28)　次回以降予定の〈日常的用法〉はこの証明を試みる。

(29)　A.㊀P.39，同㊐P.18，P.21，P.22，同㊀P.46，P.50，P.63，同㊁P.52，P.53，P.56，P.59参照。なお本文上記の「〈情念〉形成の出発点」とこの〈認識の起こり〉とは同意である。前者はA.㊁P.56に記した語である。

(30)　A.㊀P.56とP.63の註(37)参照。

(31)　これは〈間接〉の場合をさす。その身体の感覚や想像は〈外的対象〉に，身体（脳の内表面）に，〈âme〉にかかわる（B.㊀ART 22P.706も参照）。〈直接〉の場合，身体の感覚の方は〈外的対象〉に，身体（共通感覚である腺H）に，〈âme〉に，身体の想像の方は〈外的対象〉に，身体（想像である腺H）に，〈âme〉にかかわるとみる（註(33)も参照）。

(32)　B.㊀ART 25P.P.707-708。

(33)　〈ある運動〉の語が散見する一例はB.㊀ART 23 P.707参照。〈ces objets qui, excitant quelques mouvements dans les organes des sens extérieurs, en excitent aussi par l'entremise des nerfs dans le cerveau, lesquels font que l'âme les sent.（これらの（外にある）対象は，外的感覚器官のなかにある運動を起こさせながら，さらに神経を介して脳のなかに同じ運動を起こさせるのであり，この脳内での運動が精神 âme をしてそれら対象を感じせしめるのである）〉。〈ある運動〉と〈動物精気〉たる運動についていえば，前者が〈間接〉，後者が引用文Ⓥにある通り，〈直接〉における運動になろう。〈動物精気〉が〈血液〉となって〈腺H〉に伝わるのに対し，〈ある運動〉は註(32)のごとき〈神経を

動かす〉運動であり，このART 23である。〈ある運動〉は〈神経を介して〉〈脳内（おそらく〈脳の内表面のこと）に伝えられるがゆえに〈間接〉の場合に含み捉えられるのであり，そこでは〈直接〉の場合で〈腺H〉に生じてこよう想像，感覚，感情または情念と異なって，想像，記憶，あるいは情念が生み出されるわけである。〈間接〉でのこの情念は本文に記したように，〈腺H〉によらない情念であるとみる。

(34)　B.㋓ART 24P.707（そこに〈判断〉の例がある）。

(35)　B.㋒P.1158。

(36)　A.㋑P.P.63-64。

(37)　註(33)参照（註(37)に続く本文で五感（官）のうち味覚に該当する事項はないが，しかしE.の『霊魂論』P.72，P.118によると，〈味覚は触覚の一種〉とされる）。

(38)　註(33)参照。

(39)　註(25)参照。

(40)　筆者が〈感受性〉のことを長らく問うたのはこのためであるといってよい。想像のことは本文後半でみているが，〈感受性〉との比較などは今後の検討となろう。

(41)　A.㋓P.56とP.63の註(37)参照。

(42)　註(35)参照。ただしこの例外は一つだけある。次回検討。

(43)　A.㋑P.P.56-57参照。

(44)　A.㋖P.P.45-48参照。

(45)　B.㋔P.286。

(46)　B.㋔P.287。

(47)　B.㋖P.595（A.㋖P.55とP.65の註(33)参照）。

(48)　B.㋔P.277（A.㋖P.47とP.64の註(22)参照）。

(49)　註(30)と註(41)参照。

(50)　D.P.847。

(51)　D.P.542。

(52)　B.㋑P.151（A.㋑P.37とP.62の註(14)，A.㋓P.54とP.63の註(32)も参照）。

(53)　デカルトはいわゆる〈真理の探求〉でプラトンのいう理性を超自然的理性（ただしデカルトは理性として記す），〈日常的用法〉でアリストテレスのいう理性（「受動的理性）」を〈自然的理性〉として採用すると理解するが，これ以外に筆者のいう〈真理の探求〉（真の心身合一）でプラトンやアリストテレスとも異なるデカルト独自の理性があるとみる。本文のちを参照。また「受動的理性」のことはE.『霊魂論』第三巻第四章P.97から参照できる。

(54)　A.㋐①①の〈une chose qui pense〉と①②の〈Je suis une chose qui pense〉p. 1を参照。

(55)　A.㋺Ⓙ①②③P.P. 1 - 2 参照（Ⓙ③では〈esprit〉の語が記されるからして，その〈思惟するもの〉はいわゆる〈真理の探求〉におけるそれと理解できる。それに対する，註(54)でも触れたⓙ①②の〈思惟するもの〉には上記の用法はもとよりのこと，同時に〈日常的用法〉におけるそれさえ含まれると捉えられる。要はⓙ①②に〈esprit〉の語が見当たらないために，これらの引用文は〈âme〉の〈思惟するもの〉とも受け取ることができる。すると二用法が語られるとみるⓙ①②は〈不明瞭，難点，矛盾〉でしかなくなるであろう）。

(56)　〈もの〉は各〈esprit〉や〈âme〉なる精神，各〈わたし〉とりわけ各諸能力に換言されるから，これですでに記した註(30)(41)(49)は証明されたといえるわけである。

(57)　A.㋺Ⓙ③（そこに〈同じ一つの精神〉という語が記される。筆者は次回で，筆者持論の証明の一つとした，両方の精神をいっしょにする新たな精神 esprit がこの〈同じ一つの精神〉になり得るか質す。

(58)　註(55)参照。

(59)　A.㋺Ⓙ①②③P.P. 1 - 2（ちなみにⓙ①は『省察』中の第二，ⓙ②は同第三，ⓙ③は同第六にある）。註(55)も参照。

(60)　註(30)(41)(49)(55)(56)参照のこと。

(61)　A.㋭P.P.62-63参照。